

*Web用の内容見本のため、実物とはフォント・レイアウトが異なります。
また、軽量化のため画像は省略してあります。ご了承下さい。

小特集 現代女性詩人たち 与謝野晶子を祖として 第二回

中・村・文・昭・の・文・学・空・間

詩人 吉原幸子 純粹病 の彼方に

よしはら さちこ

1932年、東京生れ。東大仏文科卒。劇団四季を退団後、結婚、出産、離婚を経て、1964年第一詩集『幼年連禱』（第四回室生犀星賞受賞）を発表。1972年詩集『オンディーヌ』、翌73年詩集『昼顔』で第四回高見順賞受賞。1995年の詩集『発光』（萩原朔太郎賞受賞）に至るまで生前12冊の詩集がある。「歷程」同人。1964～67年、同人誌「うゑが」を発行。1983年には新川和江とともに「現代詩ラ・メール」を創刊、以後10年に亘っておおくの女性詩の産出に携わる。その他舞踏台本やその演出、エッセイ集、翻訳等の仕事がある。2002年歿。略歴作成・史

招待者リスト

文	丈	冉	史	花	尚
……	……	……	……	……	……
中村	内藤	クリハラ冉	鯉淵	林	河村
文昭	丈志		史子	花子	尚則

文 ここからは吉原幸子について、各人から三つの詩と簡単な感想を述べてください。

史 私は「無題」「放火」「病院にて（二）」を挙げます。

先の二編が初期、「病院にて（二）」は後期の作品です。吉原幸子の詩は初期の作品から完成度がたかく、鮮烈な感受性とそれを言葉にするすぐれたセンスには魅かれました。言葉を使って詩を書くということ、表白するということに対してのこの詩人の潔癖な姿勢には驚きます。それは吉原幸子のスタイルといってもいいくらい、晩年まで一貫して保たれているものだと思います。私たちの世代にとっては今でこそ当たり前とすら思える個人としての自意識や自我というものがここまで徹底されていて、女性がもつみずみずしい感性として言葉の透明度にと高められているのは読んでいてキモチイイですし、こころよくもありました。が、そうした快さや読みやすさに比べて読み応えというものがどこか無く、それが違和感としてのこりました。

また「痛み」というものに対しては相当つよい人だと感じるとともに、彼女にとり何か肝心な痛み、もっとも大事な一言をあえて黙秘しつづけていることを予感させ、そうした意識的な自制によってその詩にはりつめた緊張感があるからといっていいとは言ってしまうたくないという思いがあります。

晩年にいたつての母親についての詩を読み、私が驚いたのは、まさか母という一言をこの詩人が使うとは思っていなかった、むしろ絶対使わないという決意めいた感性すら感じていたので、その母という一言に、かえって私は彼女がずっと黙秘し続けた痛みについての暗号めいたものを感じました。母という娘にとつてはヤツカイなはずのその対象を淡々と書いているようであつてすら、だからこそ余計に、そこにタブーとして働く明晰で意識的な彼女による言語操作を見た気がしたんです。

私にとつて吉原幸子は、純度のある傷のその痛みを最後まで感じつづけることと引き換えにして、その詩に稀有な透明度をつくりつづけた詩人、最後まで本当の一言をけつして漏らさなかった自製の詩人という印象があります。

花 私は、「無題」「名まへ」「病院にて（二）」を挙げます。

初期の「無題」では、浴室で「なめくぢ」に塩をかけたならなめくぢが消えた、消えたけどまだそこにいるという感性があります。私がいるということ、私がないということの間で詩人としての眼で体の芯まで冷えるような

ぬるさを感じています。後期の「病院にて(二)」では私の母と私という問題設定があります。しかしその詩法についていえば、日常の題材から書きおこすようでありながら、母と私という問題の根底にあるものから言葉が遠くへそれてゆく感じがし、母という対象への道が片道しかないという壁を感じました。

文 僕は「無題」「虐殺」「薔薇」を挙げます。先の二つが初期の詩で、最後は晩年の詩です。大まかな印象としては、戦後女性詩人として挙げた四人の女性の中で一番読みやすかった。あと、これは文字面の問題ですが、ひらがなと漢字のバランスがよいということ、漠然とした言い方ですが、いい意味でも悪い意味でもプロフェッショナルな詩人だなという印象を受けました。読んでいて、この詩人に感じるのは、残酷さや苦さというモチーフを使いつつ、対象を自分の感性に取り込んでいく、そういうようなものをこの詩人に感じます。「無題」「虐殺」「薔薇」はそういうものを感じさせる詩で、この詩人の特徴を示す作品ではないかと選びました。

再「昼顔慟哭」「塔」「散歩」をあげます。詩集『昼顔』は一九七三年刊、「塔」の入った詩集『オンディーヌ』は一九七二年刊。この二冊は詩人中期の対照的な二つの詩集です。この二つの詩のもつ愛のテーマが、私にはとても切実で、その分、吉原幸子という詩人を知るための一つの核になると思っております。それともう一つの手がかりとして、エッセイですが、「ヒロインたち」という作品もあげたいと思います。吉原がずっと抱え続けていた「純粹病」の女性たちとして、神話や物語のヒロインをとりあげているエッセイです。

また私は、吉原幸子の詩の本質は「声」であるという感じがしました。このことについては、ゆっくり語りたいと思っています。

尚 僕は「望郷」「ある」「蝉」の三つ。中期から後期にかけての作品です。吉原幸子の詩は、例えば恋愛や出産、そして母親についてなど、普遍的とはいわないまでも多くの女性が直面するだろう問題に正面から向きあっていると思います。その意味では戦後を代表する女性詩人だといえるのでしょうか、その律儀なまでの向きあい方が逆に気懸かりになるときもある。どういふことかというところ、吉原幸子は自己劇化型の詩人だなんて言い方もされてますが、まさに彼女の言つところの「純粹病」に罹った女性のイメージを忠実になぞっているようでもあって、それが完璧すぎるあまり、どこか女性を義務的に

演じているような詩だと感じられもする。僕が、母親の登場する詩でも『花のもとにて 春』からではなくわざと「望郷」を選んだのもそれと関係して、最後の一行で少しダサいというか、きれいに枠に収まらない肉声のようなものが聞こえてくるところがよかったからです。

文 今日、この座談会を長澤延子から始めたということには僕の決意のようなものがあります。長澤延子の価値観や人生観というものには、ギリシャ神話の「シレノスの呪い」があります。その呪いとは「最善とは生まれてこないこと、次善とは生まれてすぐ死ぬこと」ということです。人生は、生きていけばいくほど汚れていくというような価値観です。いずれにせよ、吉原幸子の持っている魂、詩人の心というものを何処に置くかと言いますと、僕はほぼこの長澤延子と同じような心あるいは価値観というものを持っている人だと想うのです。

では、どこが違うのか。吉原幸子は長澤と違って、何らかの事情、何らかの理由があって 生きる ということを選んだ、一歩踏み出したということですよ。

僕は吉原幸子という人は非常に苦行僧のようにと言いますが、真面目さにおいて長澤延子さんに匹敵するような人であると思えます。また 生きる ということに賭けた人であると思えます。具体的には女優をやったり、小さい頃から秀才であったりということがあり、それから日本の近代女性詩人の王道としての与謝野晶子、深尾須磨子、それから永瀬清子というところで成り立った 人は生まれ、童女から少女へ、それから女になり妻になり母になり、子を産み育て、老いて死んでいく というゆるやかな女の一生ということを、反発しながらも継承しようと努力した人だと想います。吉原幸子は魂においては長澤延子とおなじとみていいとは思っただけで、生き方においては永瀬清子さんの持っている価値観というものをやはり継承しています。結婚して、子供を産み、離婚をしながらもちゃんと子育てもしています。詩のスタイルは変貌していますが、晩年の母親についての詩、それから井坂洋子さんも傑作だと言っています。映画「八月の鯨」をモチーフにした詩「散歩」は、吉原幸子の詩人の成熟度を非常に示しているのではないかと想います。

こうしたことをトータルでおさえた上で、吉原幸子の詩の表現に入る前に、彼女の「ヒロインたち」というエッセイに触れておきたいと想っています。

オフィーリア

オフィーリア、男のエゴのいたましい犠牲……ハムレットはあなたの前でさえ演技をつづけた。どうかして二人だけのほんの一瞬をぬすみ、「あれはウソだよ。計略だよ」とささやいてはくれなかった。……二七気狂いに苦しめられ、しかもその愛する人に父を殺されてあなたは狂った。あなたこそは二セではないホンモノの、うつくしい狂気だ。……シェイクスピアという人はあなたを舞台のうら側に放り出して、いつの間にか死なせてしまった。

サロメ

義父王の捕えた予言者に恋し、相手から拒まれ蔑まれれば、こんどはその男の首を所望する女 サロメ。火のように激しいことはたしかだ。だが、これをいったい、悪女とよぶべきなのか？ あるいは、殺された予言者ヨカナン（ヨハネ）と匹敵するほどに頑なな、一種の殉教者とみなすことはできないだろうか？ ……
名月をとつてくれると泣いた幼な子のように、欲しいものを手にするそんな不器用な方法しか知らなかった頑固な悪女、サロメよ。

アンチゴーヌ

……自らに忠実であるうとする、ただそれだけの理由で頑固に、強情に破滅を選ぶ女。……彼女は、自らの罪を知ったのち眼をえぐりとって放浪した、あのエディプ（オイディプス）の娘である。エディプ亡きあとのテーベを、彼女の二人の兄、エテオクルとポリニスが争い、二人は相討ちに斃れる。王位を継いだ叔父クレオンはエテオクルを国葬に付しポリニスの死体は逆賊として放置し、その埋葬を死刑をもって禁じる。アンチゴーヌはその禁を破って、白昼、衛兵たちの眼の前で死体に土を被せようとし、捕えられるのである。……埋葬という儀式自体ははかけた、空疎なものであることを、少くともこの現代のアンチゴーヌは知っている。だが彼女は自分の行為の理由を訊ねられると、こう答える。「兄のためでも、誰のためでもないわ。私のためです」……

オンディーヌ

……オンディーヌは水界の王の娘だが、……人間界で暮らしている。ある日道に迷った騎士ハンスをひと目で好きになってしまふところから、人間と妖精の間の悲劇的な恋がはじまる。……ハンスは……人間くさい、平凡な男なのだ。……

オンディーヌと水界の王との間にはひとつの約束が交わされていた。もし彼女の相手が貞節を守れなかった時は、その男は死ななければならないのだ。オンディーヌはハンスを愛するがゆえに、初めて人間くさいウソをつく。自分が先にある男と通じてハンスを裏切ったのだと……ハンスをかばおうとする。

だがこのウソは、父王にもハンスにも、結局はれてしまふ。真実なもの、素朴なもの、貴重なもののおそろしさに触れ、「僕には重すぎる役目だった」とつぶやくハンスに、すでに狂気と死は迫っていた。そしてオンディーヌにも、人間界の記憶を失う という罰が。忘却と死とに引き裂かれてしまふ永遠の別れ ……

オンディーヌを呼び戻す声がきこえる。一度、二度。ふたりは急いで思い出を語り合うが、最後の数秒は、くちづけのために黙る。三度、「ここはどこ？ この人はだれ？」「ハンスだ。死んでいる」「きれいな人。生きていたら、さぞかし好きになつたでしょうに」……

丈 この「オンディーヌ」の話は、ハンスという青年が平凡な男であるということがひとつのポイントですね。オンディーヌが父王と交わっていた約束相手の男がお前にウソをついたら死んでしまふ、それからお前じしんも記憶を失うという約束が現実のものになつてしまふ。これはちよつとギリシヤ悲劇の構造でもありますが、結局はハンスは死ぬはめとなりオンディーヌは永遠の別れを味わつ……

記憶が薄れていく最後の数秒、オンディーヌとハンスは急いで思い出を語り合い、口付けを交わす。そして目覚めると、「ここはどこ？ この人はだれ？」と聞くと、「ハンスだ。死んでいる」と言われるけど、オンディーヌはポツと言つ、「きれいな人。生きていたら、さぞかし好きになつたでしょうに」という幕切れです。

冉「ハンスだ。死んでいる」とはおそらく水界の王の言葉でしょう。

文 こうしたところに吉原幸子は非常に敏感に反応しています。この四人のヒロインに通じるものは、吉原幸子のすべてと言つてしまつてもいいのではないかと想います。

そしてこの領域は、今まで僕らが語り合つてきた長澤延子の領域でもあるのではないかと想います。「ここはどこ？ この人はだれ？」「きれいな人。生きていたら、さぞかし好きになつたでしょうに」というところは実は長澤延子の魂にもありますけど、長澤延子の場合にはハンスに恋をするという人生上の物語には入らない……

でも吉原幸子はこの愚かな行為をするオンディーヌに美、あるいは詩を感じています。あるいは人生を感じているといつてもいいでしょう。僕の中で今言えることは、吉原幸子の魂の中にはオンディーヌがいるし、それから恋をした男が自分のものにならなければ首を斬るという頑固な悪女サロメもいる。また、父と兄妹関係であるという複雑な血をもつアンチゴーヌ。法を

破って、自分と血のつながりをもつ兄が鳥の餌食になっているのは堪らない
と言って埋葬する、その結果法の裁きで死罪となっても そんなことをするお
前はいったい何なんだ、何の為にそれができるんだ?! と王に聞かれる
と、誰のためでもない、私のためなんだ 答えるアンチゴネ。この私のた
めなんだ というところにも、吉原幸子は非常に純粋に反応する魂をもって
います…。

丈 そしてもう一人の重要な女性がいますね。吉原幸子が若い頃から読んで
るケッセルの『昼顔』という小説に描かれたセヴリーヌという女性に彼女は
心が動いている。16、17歳の頃に読んだことについてはこう書いている。

「私はセヴリーヌの あやしい妄想 などごく漠然としか理解していなかった
はずだ。だが、自分の瘦せた手首や紫色の爪を何時間もいとおしく眺めたり、
体力の恢復に官能の喜び を覚える一方、熱の後遺症が薄れて日常の健康に
戻ってしまうことをかすかに惜しんだりする微妙な感覚がそのまま、消せな
くなった妄想 悪夢への欲求 娼窟への道とつづいていく展開の見事さ
に、私はその入り口から入れたというだけで、この架空の悲劇を最後まで一
気に、セヴリーヌと共に駆けぬけてしまったのだった。そしていったん、私
は罪の匂いをするこの本から身を引き離れた。」
またこの『昼顔』を題材にして書いた詩もあります。

昼顔慟哭

死んだ 男 ^{びへる} の傍りで

あれきり死んだあなたは死んだか

告白は誰への刃だったか

二度死ぬことは

二度殺すよりたやすかったか

償ひのために罪を犯した

心のためにいのちを閉ざした

あなたにも きこえるか (ああこの夜の)

遠い波音

遠い雷鳴

遠い汽笛 遠いざざめき

呼吸する樹々の匂ひにつつまれ
窓からの月に濡れた二つの死体
が
ふと むせびなく夜はないか

冷えた手足の静脈が

ひそかにふくらむ夜はないか
のびつづける爪が夜明けをきり裂くとき
も

沈黙は愛か
愛は透明か

白い喪服

心は死んだか

尚

セヴリーヌという女性像は、その他のオンディーヌやアンチゴネという
純粹病 の「ヒロインたち」とはちよつと違いますね。セヴリーヌは非常に
潔癖性で結婚した相手の男と関係が持てなく、それゆえ彼女の導きだした解
決法が「昼顔」というように娼婦になることです。娼婦として他の男と関係を
持つことによつてはじめて夫を愛せる。ここには、純粹病 にはもう一つ裏
の側面が必要とでもいうか、純粹病 を維持するためには一方で泥にも足を
突っこまなければいけないという逆説的な覚悟が仄見えます。それが吉原幸
子を考える上でも参考になるかもしれませぬ。
「昼顔反歌」という詩を読みます。

昼顔反歌

すべての女は昼顔だ

皿の破片を泣きながらつなぐごどものやうに
いちぢらしく

心と肉をつながつとする

いふことをきかない肉に

眉をひそめながら 心をはりつけてしまふ

でなければ

いふことをきかない心に
ふるへる指で 肉をはりつけてしまふへ

すべての女は娼婦だ
すべての女は聖女だ
鍵と鍵穴との雑居だ

心の突起は肉の窪みに
肉の突起は心の窪みに
かたつむりのやうに 独りのなかで交り合ひ

すべての女は
男たちから遠く ひそかな唇顔だ

文 この詩には、戦後女性詩としての一つの側面があります。

史 戦前の女性が口にしなかった言葉、できなかった思いの細部を吉原幸子は毒味ものとして言葉にしていると思います。戦前の女性詩ではやっぱり大まかなものも含めて「女」という言葉が何か男性との違いに対してとか、一つの立て方として使われているとかんじますが、ここにきて吉原幸子の言葉にはより肉体にもなう性との分裂や、ごまかしのきかない感情や欲求が、私にはその言葉ひとつひとつがこちらに影を落としてくるようなナマナマとしたものとして感じられもします。私自身に 女であること のコンプレックスがあるからだと思うのですが、戦前の女性詩がもつ「女」という言葉の迫力が私にはかえってリッパ過ぎる感じもして、かといって垂れ流し的な 性で終始してしまう 女 のうち出し方というのも何か自分には違う気がしています。：そついったところで吉原の「女」という言葉は、私を感じてしまう 女 というものへの頼りなさや遠さ、未処理なフクザツさも含めて、受け留めてくれているような内容があると思う。吉原の「愛」とか「女」という言葉は、精神的か肉体的か、他者との愛か自己愛か、というキレイな解決や便宜なのではなくてその分裂のあわいの揺れのなかで問われているような気がします。

再 正直に言えば、私にとって吉原は、長澤延子と同じ魂をもつものと思うことへの強い抵抗があつて、読むのに内臓からくるような気の重さを感じたり

もしました。それはやはり、どうして吉原幸子が詩集『唇顔』を書いたのか、『唇顔』で吉原が本当に書きたかったこととは何なのか、それがとてもわかりづらくて、ずっとひっかかっていたからです。私は吉原が、さきのオフィーリアやアンチゴーネのように、自分自身が 純粹病 を生ききる、ということのみ、望んでいるのではないか、それを果たそう、果たすための方法を見つけようとし、その方法として、ケツセル『唇顔』におけるセヴリーヌの衝動 心と肉の分裂に賭ける を見つけたのだ、そしてそれをそのまま吉原も手にしたのではないか、と思えたからです。でも、それではどうしても、違和感が残りました。そのことについて、すこしヒントになるかと思える文章を吉原は書いています。読んでみます。

「詩集『唇顔』と表裏をなす一対として私には『オンディーヌ』という詩集もあるが、アヌイの源流であるジロドゥの『オンディーヌ』では、超人間的純粹存在としての 水の精 が一度だけ人間の嘘をまねるのに対し、『唇顔』は過ちを犯し易い人間の純粹衝動を扱っていて、その意味でも対照的だ。

私はセヴリーヌを、今は完全に理解する。女として、おそらく男性以上に。時折彼女を体験しさえするのだ、その愚かさ、本能への忠実さに於いて。」(一冊の本 ケツセル『唇顔』)

花 五つの女性像がありましたが、私はセヴリーヌ的な要素を自分に感じています。オンディーヌの「純粹病」に対してセヴリーヌの「純粹衝動」とは何か。私は、私たちが体をもっているというゆるさや遅さを棄てて、観念の言葉に走る衝動があるので、本来は一つであるはずの「肉」と「心」を分離したものと感じ、独房のようなところにいるセヴリーヌに自己嫌悪的な身近さを感じました。

史 そういうところで素直に言いますと、私は『唇顔』のセヴリーヌに、そしてセヴリーヌに共感をおぼえる吉原幸子に、私の中でやましさも含めて否定したり去勢したりできない一つの資質としてあると感じます。他人事のように語れない大事なものとして。だからこそ「私はセヴリーヌを、今は完全に理解する。女として、おそらく男性以上に。時折彼女を体験しさえするのだ、その愚かさ、本能への忠実さに於いて。」という吉原幸子の言葉には、反発を感じます。ここで終わりにして欲しくないと思っています。吉原幸子がこうして言葉にしたという明晰さはすごいなと思う一方で、『唇顔』やセヴリーヌについて書く彼女は、セヴリーヌの純粹衝動を甘受しているな

どとは決して思えませんが、けれど「完全に理解する」という言葉でキレイ事すれすれの透明な蓋を閉じてしまっているとも思え、どうしても居直りのようなものがあるのではないかと疑ってしまいます。

セヴリーヌの「純粹衝動」というのは、「愛」の透明度や純粹度をもとめるからこそ、濁った不純物もろとも沈殿することで、愛する夫との精神的愛というものを完全分離した上澄みのように保ちたいという、分裂の両極があったのだと思います。吉原幸子はそうした両極を生きることによく魅かれていながらも、実人生においてではなくしかしセヴリーヌの思いを殺すことなく生きることに、沈殿物と上澄みという分裂の両極の思いを生きることに、詩に向かう衝動やエネルギーでもあったのではないかと思えます。

セヴリーヌは吉原幸子にとりつよい共感を覚える女性像だと思えます。しかし沈殿物と上澄みという分裂については、どうなのでしょう。セヴリーヌという女性はこの分裂を肯定し得ている女性像だと思います。しかしこの肯定は私にはうながしきれないものがどうしても、のこってしまうのです。問題は、このセヴリーヌという女性の分裂のあり方を吉原幸子は肯定したのか、その肯定の仕方に疑問がのこってしまうんです。

文 史さんは吉原幸子の詩をすごくいい詩だなと想っても、同時に違和感を感じてしまうということですね。

ここでもう一度「一冊の本 ケツセル『昼顔』」を読んでみます。大人になつてから吉原幸子はあらためてケツセルの『昼顔』を読み返したという箇所です。

「……『昼顔』にケツセル自身の付した堂々たる序文に今回は改めて目をひかれ、感動した。『これは異常者の臨床報告ではない。すべての男女にひそむ可能性にいつそう鋭利な切先で触れるために、私の考え出した例外的なシチュエーションである』そして『この主題は肉欲の迷いではない、愛である』という、断固たる宣言。肉体的に夫を裏切ったセヴリーヌが、不能者となつた夫に自らの裏切りを告げる告白の動機は、夫の眼に浮かんだ羞恥と謝罪の色彼の優しさそのものだった。『彼女は今まですべてに堪えてこられた、だが彼の何も知らない愛撫にだけは堪えられなかった』というこの簡潔なクライマックスを、私は作者の言葉通りに、うなずきながら受けとめた。」

こういう文章に僕は吉原幸子が人生を生きる秘密を嗅ぎ取つたと想っているのです。もし彼女がオンディーヌ、アンチゴーン、サロメ、オフィー

リアといった神話的なヒロインたち、そこだけにとどまっている 純粹病だったとしたなら、やはり長澤延子と同様に、人生の一步というものを踏み出せなかったと想うのです。

花 吉原幸子は「すべての女は昼顔だ」と断定しています。しかし、女であることは、肉欲の沈殿物と上澄みという分裂の両極をもつものなのか、疑問が残ります。

文 再さんは、ケツセルの非神話的な女性セヴリーヌには違和感を感じる、ということですね？

再 はい。私はケツセルのセヴリーヌを純粹とは呼べません。

そして、今「一冊の本 ケツセル『昼顔』」の、最後の段落を読みかえして気づいたことは、吉原幸子が詩集『昼顔』でえがこつとした女性（セヴリーヌ）とは、ケツセル『昼顔』のセヴリーヌと全く同じではない、ということではないかということです。

文 花さんは疑問をもつと言いましたが、それはどういうニュアンスなのか？ 反発 でもないんですか？

花 ケツセルは小説『昼顔』の主題は愛であるというけど、セヴリーヌの視点で物語を読んでいくと、まず娼婦になることで夫を通過して、事後に夫に自分が娼婦であると告白している。セヴリーヌには自覚していない二つの心があつて、そのために現実とその解決とが転倒しているのではないかと思えます。それは私自身のなかにもある対象への「愛」と対象からの「自衛」の二つの心ではないかと思えます。

文 ケツセルは「これは異常者の臨床報告ではない。すべての男女にひそむ可能性にいつそう鋭利な切先で触れるために、私の考え出した例外的なシチュエーションである」、「この主題は肉欲の迷いではない、愛である」と言っている…。こここのところに女性陣もつまく切り込めていない気がします…。

文 また「彼女は今まですべてに堪えてこられた、だが彼の何も知らない愛撫にだけは堪えられなかった」と書き加えています。自分の愛する妻が昼顔

として娼婦をしている。そして戻ってきて夫にたいして愛の確認が出来る。

ところが男というのは、優しいのだけれど、屈辱を感じてしまう。ここがポイントです。だから想わず、出来もしないのに肉欲を以ってセヴリーヌに愛撫のまねをする。それまですべてに堪えてこられたセヴリーヌは、しかしこの愛撫だけは堪えられなかった。この一文が、この文学作品のクライマックスです。吉原幸子はこのことを「この簡潔なクライマックスを、私は作者の言葉通りに、うなずきながら受けとめた。」と言っていることがミソです。分かりにくいかもしれませんが、このところが吉原幸子の 純粋病 あるいは潔癖症ということと四人の典型的なヒロインの女性とは違った 現代的な女性 の生きるすべというものがあると僕は感じてしまうのです。

そしてこのあとの一文が吉原幸子の才能ではないかと想います。「私はセヴリーヌを、今は完全に理解する。女として、おそらく男性以上に」。ここが吉原さんの文学読み といいますが、一つの才能であると想います。そして吉原の詩法の秘密もここにかくされている。

再 文先生が今あげた一文、「彼女は今まですべてに堪えてこられた、だが彼の何も知らない愛撫にだけは堪えられなかった」、これを書いたケッセルという人(男)に私は驚きます。この一文を書きたいがために、セヴリーヌを造形したのではないかと思うくらいに……。まるで、女性の心(愛)へと挑戦するかのよう、ケッセルは序文をこう結んでいます。「彼女を愛しむ者は：僕だけだろうか。」先の一文を書くことができたケッセルは、男性には届かないはずの心(愛)をもつセヴリーヌを、まさに愛したのだと思います。そしてセヴリーヌが最も耐えられなかったのは、「私が愛されている」というその事実のことだったのではないのでしょうか。作者ケッセルが愛することで生まれたセヴリーヌがいるように、このような女性とその女性の心(愛)をすべて愛するという男の愛が確かにあるということ。しかし、このことを吉原はどう「受けとめた」のでしょうか。私は思います。『昼顔』のテーマがセヴリーヌのピエールへの愛である というケッセルの言葉を、吉原がそのまま真に受けとめていないのではないか。そしてこのことが、吉原がセヴリーヌを男性(ケッセル)以上に理解すると発言してしまう、真意にかかわっていると思っております。

*続きは紙媒体の「えこし通信」創刊準備号(無料)でご覧頂きたいと考えております。

(えこし会広報室)